

敬愛大学出張講座 津田塾大学・女子美術大学・敬愛大学 3大学連携

明治150年 津田梅子・佐藤志津に学ぶ 国際社会に向き合う女性たち

平成30年12月15日に佐倉市立中央公民館が、佐倉市と連携協定を結ぶ3大学から講師を招き、敬愛大学と共催で同大学出張講座を開催しました。その概要を掲載します。

講演1

「現代に生きる津田梅子からの学び」

津田塾大学文学部教授 大類 久恵先生

津田梅子の生涯と津田塾大学

津田梅子は、元治元年（1864）12月に、佐倉出身の津田仙、初子の次女として生まれました。

梅子の生涯の大きな転機は、明治4年（1871）11月に開拓史派遣の女子留学生として渡米したことです。乗船時は6歳で、船上で7歳の誕生日を迎えました。そして、ワシントン近郊のジョージタウンに住むランマン夫妻に預けられ、初等・中等教育を受けました。

明治15年に17歳で帰国。10年の滞在でした。帰国後、明治18年に華族女学校教師補、後に教授になりました。

明治22年（1889）7月、華族女学校を休職して24歳で再び渡米、プリンマー大学に入学、明治25年に卒業して帰国します。帰国後は復職し、その後、高等師範学校教授を兼任しました。明治33年（1900）、35歳で辞職し、現在の東京都千代田区に女子英学塾を開校しました。これが津田塾大学の前身です。

大正4年（1917）、53歳で病を発し、二年後に運営から退き、昭和4年（1929）に64歳で亡くなりました。

当初の校舎は、大正10年（1923）の関東大震災の翌日の火災によって全焼しました。しかし、規模拡大に備えて、その前年に現在の東京都小平市に二万五千坪の土地を購入していまし

た。梅子の死後、昭和6年（1931）にその地に新校舎を建築しました。現在の小平キャンパスです。

現代に生きる津田梅子からの学び

1 海外留学

6歳の少女にとって海外留学はとても大きな出来事です。親にとっても大きな決断であり、大きな何かを見据えての決断なのだろうと想像します。

当時のアメリカは、南北戦争後、分裂した国家が再び一つになりつつある時代でした。この時代はまた、大規模な工業化、都市化の時代でした。このような時代のアメリカで梅子は少女時代を過ごしました。そして英語を身につけていく一方で母語の日本語を使えなくなっていました。帰国時に母親とコミュニケーションがうまくとれなかったそうです。これは特異とも言える体験です。ホストファミリーであるチャールズ・ランマンも同様に考えていたようです。

昭和59年、津田塾大学で膨大な英文の手紙が発見されました。梅子がランマン夫妻に宛てたものでした。ランマン氏は、梅子の体験をいずれ本にまとめようと考えていたらしく、手紙を保管していました。ところがランマン夫妻が亡くなり、英学塾教員だったアナ・ハーツホンに届けられたようです。アナの荷物から発見され現在は津田梅子資料室で保管しています。

特別な体験であったゆえに母語の再習得がかなり困難でした。もちろん後には日本語を習得

し、日本語で生活していましたが、英語の方を使い慣れていたと思います。当時、海外渡航は特別な体験であり、通常ではできない体験でしたが、代償もあったといえます。

二度目の留学先は、ペンシルベニア州フィラデルフィアのプリンマー大学で、三年間の留学でした。華族女学校を休職して自分の意志で留学しました。プリンマー大学では生物学を学び、カエルの卵を研究して論文を書きました。

この大学は、梅子が留学する四年前、1885年に女子大学として創立されました。二代目学長はM・ケアリ・トーマスという女性ですが、優秀な研究者で、男性と同等の高等教育を女性に授けようという指針をもとに運営していました。梅子は日本の女性教育の後進性を意識していたと思います。確かにアメリカの女性教育は進んでいたのですが、そのアメリカですら男女同等の高等教育は、1870～1880年代からでした。女性の教育は、1783年の建国当初からそれなりに重視されました。女性は「共和国の母」として市民を育てるのだから教育を与えなくてはならないと考えられていましたが、初等中等教育に止まっていたのです。

西部開拓に伴い、高等教育、特に職業高等教育（農学、工学、教職等）が必要とされるようになります。そこでモリル法に基づき連邦政府の予算で男女共学の州立大学を作っていきます。ただし女性と男性に全く同じ教育を与えられていたのではなく、Ladies departmentとして、女性には男性とは違う学問が与えられました。その中で最重要だったのが、教員養成課程です。教育は、子供を育てる、市民を育てる、そういう役割の延長にありますので、女性が入れる領域であったのです。

一方で哲学、音楽、芸術など、実学以外を男



津田 梅子
(津田塾大学津田梅子資料室所蔵)

性と同等に学べる高等教育機関が女子大学として創立されたのは19世紀の半ば以降です。1865年にヴァッサー大学が、1875年にウェルズレー大学が、1885年にプリンマー大学が創立されました。これらの女子大学では男性の大学に匹敵する高等教育が提供されていました。梅子がこの時期に、男性と同等の高度な教育が与えられる女子大学で学んだことは重要です。

1870～1880年代は、高等教育機関、大学で学ぶ最初のアメリカ女性を輩出した時期です。その時期に梅子はアメリカに留学しました。つまり、梅子は、大学で学ぶ女性として日本人で最初の世代であったのみならず、アメリカでも最初の世代であった女性たちと同じ場で学んだのです。梅子とともに留学し、少し年長の大山捨松と瓜生繁子はヴァッサー大学を卒業し、先に帰国しています。彼女たちもまた、アメリカで高等教育を受けた第一世代の女性たちとともに学び、帰国しました。

高等教育を修めた女性にとって教育者となることは、大きな意味を持っていました。教職は、アメリカでは特に初等・中等教育に関しても、女性が就ける、女性に向いている職業として位置づけられていました。女性には子供を育てる、市民を育てる、そういう責任があったことも指摘したとおりです。

2 梅子を支えてきたもの

一つは、官費留学生としての責務です。これ

は三人の女子留学生がともに考えていたことです。日本女性の教育に尽くしたい、特に日本女性が高等教育を受けられるようにしたいという思いがあったのでしょうか。

二つ目は、女性の地位、高等教育における日米格差の大きさです。梅子が留学した当時のアメリカは、ようやく女性の高等教育を實現させたところでした。アメリカで高等教育を受けた第一世代の女性たちは、卒業後、教育者、研究者、改革者として多方面で活躍しました。日本では、女性が高等教育を受ける機会がなく、女性が専門職に就く機会がない。そこに格差がありました。日本女性には、職業婦人としてキャリアを身につけるための教育の場がない、求められていない。ならば自分で学校を作るといふ夢を大きくしていったと思います。

3 日米女性たちの連帯

日本の女性のための高等教育機関を作る。これは女性たちの連帯があったからこそ実現しました。

津田塾大学津田梅子資料室に三点の写真があります。和装の五人の留学生のうち、思春期にさしかかる二人は一位でホームシックのため帰国し、幼い三人、梅子、大山(山川)捨松、瓜生(永井)繁子が残りました。皇后に拝謁する前に撮影したのでしょうか。渡米後の写真は洋装です。梅子、捨松、繁子の三人で写る写真もあります。三人は生涯親友、盟友、同志として日本の女子教育を支えています。

梅子より年長の大山捨松は、ヴァッサー大学を卒業して帰国しました。日本初の学士号を取った女性です。明治15年(1882)に帰国、その翌年に親子程の年上の大山巖陸軍卿と結婚し、伯爵夫人(後に公爵夫人)となりました。捨松は、その知名度をよい意味で活用し、多方面で梅子を支援しました。そして女子英学塾の顧問、同窓会長を務めました。英学塾の経済的な危機には母校の卒業生から寄付を集めました。大正6年(1919)に58歳で亡くなりました。スペイン風邪、インフルエンザが原因でした。

瓜生繁子は、明治14年に帰国し、瓜生外吉という軍人と結婚しました。繁子もヴァッサー大学に入学して、スクールオブアーツの音楽専攻でピアノ演奏コースを卒業しました。帰国の翌年に文部省音楽取調掛、現在の東京芸術大学音楽学部の教授として採用され、その給与はかなりの高額でした。しかも七人の子を産み育てた。キャリアウーマン、ワーキングマザーでした。明治35年に退職し、女子英学塾の社員となりました。捨松の死後も梅子を支え続け、梅子より一年早く亡くなりました。

梅子を支えたアメリカ人女性もいます。アリス・ペーコンとアナ・ハーツホンです。

アリスは、捨松のホストシスターでした。捨松は帰国前にアリスに自分たちの学校創設への協力を依頼したのです。そして明治21年に梅子がアリスを華族女学校講師として招聘しました。アリスは一年間滞在し、梅子と一緒に家に住みました。

その後、梅子はプリンマー大学に留学し、アリスも帰国をしました。帰国したアリスは *Japanese Girls and Women* を出版しました。梅子が女子英学塾を創立すると、アリスは再来日し、そこで教師を務めました。その来日前に梅子の学校を支援するためにフィラデルフィアでフィラデルフィア委員会を結成しました。

そこには梅子がプリンマー大学で出会ったアナ・ハーツホンも加わっていました。アナは、学校創設時には教師として来日しました。関東大震災で校舎が全焼したときには、復興資金を集めるためアメリカに帰国しました。サンフランシスコにいた安孫子余奈子(梅子の妹)と一緒にフィラデルフィアに行き、募金活動を行いました。その募金で1931年に建てられたのが、津田塾大学のシンボル、本館のハーツホンホールです。

女子英学塾は、フィラデルフィア委員会の女性たちが支えたのです。千駄ヶ谷キャンパスの建物にはアリス・ペーコンホールという名前が付けられています。アナとアリスは、その名を

津田塾大学に残しています。

こうした日米女性の連帯は、女性の高等教育がまだ夢であった時代から作り上げられたのです。そのような時代は終わっているはずですが、今日でもなお女性にはいろいろな意味で生きにくいところがあります。最近でも医学部入試の不平等問題が起きたりしています。連帯はまだ必要です。例えばアメリカで始まった *#MeToo* 運動のように、女性の連帯は、これからも女性への差別撤廃運動や女性の社会進出を支えていくことでしよう。

講演2

「私立女子美術大学を支えた佐倉出身の偉人 佐藤志津の生涯と功績」

享美術学歴史資料室委員 高橋 直子 先生

佐藤志津の生涯と功績

佐藤志津は、嘉永4年(1851)に山口舜海、さだの長女として生まれました。舜海は下総の小見川藩の医者の次男で、佐倉順天堂に学びます。そこで才能が認められ、佐藤泰然の後継者・養子になり、志津も2歳で佐藤家の一員になります。

舜海は、佐藤尚中と改名し、長崎で西洋医学を学び、佐倉養生所を開設しました。明治になると大学東校初代校長に就任し、日本の近代医学とその教育の基礎を築きました。

志津は、幼少期から、漢学・国学を学び、8歳から三味線、長刀、香、花、茶道を学びました。13歳で堀田正睦の息女・松姫のお相手となり、御殿で茶道など稽古事と一緒に学びました。16歳の時、佐藤進と結婚しました。

進は、安政6年(1859)に佐倉順天堂に入塾し、尚中の後継者・養子となりました。明治2年(1869)、明治政府の公式旅券第一号を得て、ドイツ・ベルリン大学に留学しました。

東洋人初の医学博士号を取得して、明治8年に帰国しました。帰国後は、順天堂院長や東京大学医学部第一・第二医院院長を務める一方、西

南戦争、日清戦争の際には陸軍軍医監となり、明治28年(1895)には陸軍軍医総監に就任しました。

志津は社会貢献に努めていました。明治12年に東京・茅場町に孤児や貧しい子供たちを救済する福田会育児院が設立されると、婦人部である福田会恵愛部の設立発起人となって尽力しました。

明治17年、女性の医術開業試験受験が可能となり、女性に医師の道が開かれました。志津は、進と共に彼女たちを支援しています。日本で三番目の女医、高橋瑞子は、後期試験の臨床実験では順天堂病院で学びました。入学金は進の配慮で免除されたという記録があります。開業時には志津が資金援助したと言われています。

吉岡彌生は、医学校・済生学舎の在学中、医師開業資格取得後も順天堂医院に実地見学に通いました。その後彌生は明治33年(1900)に東京女医学校を創立しました。

私立女子美術学校の創立

私立女子美術学校は、明治33年10月に横井玉子・藤田文蔵・谷口鐵太郎・田中晋により創立しました。

玉子は、明治5年に18歳で結婚しました。三年後に夫が病没、熊本から上京し、東京府師範学校にて裁縫・女礼式(作法)の教員資格を取得して教員として自立していきます。その後キリスト教徒になり、ミッションスクールの新栄女



佐藤 志津
(画像資料提供「女子美術大学歴史資料室」)

学校(後の女子学院)の教職に就きます。事務監督も担当し、その後は料理・図画、宿舍舎監も担当しました。

社会活動にも関わりました。廃娯・禁酒禁煙・一夫一婦制の確立を目的とする東京婦人矯風会に参加していました。他に女性の自活のための職業訓練機関である女子慈愛館の設立に力を注ぎました。

藤田文蔵は、明治9年日本初の官立美術学校・工部美術学校彫刻学科で塑造を学び、写実的な作風の彫刻家として活躍しました。その後、東京美術学校(現在の東京藝術大学)彫刻科で教え、明治33年に同塑造科で教授を務めました。私立女子美術学校開校後は、東京美術学校教授と私立女子美術学校校長を兼務していました。また、キリスト教の洗礼を受け、晩年は伝道活動を行いました。

私立女子美術学校建学の精神については、東京府に提出した私立学校設立願に芸術による女性の自立・女性の社会的地位の向上・専門の技術家・美術教師の養成と記載されています。玉子が矯風会で活動した思い、教員として自立して生きてきた経験がそこに込められています。

当時の学科編成は、本科普通科・同高等科・選科普通科・同高等科・研究科の五科があり、各科に日本画・西洋画・彫塑・時絵・編物・造花・刺繍・裁縫の八学科がありました。明治42年に各専攻に高等師範科を設置し、大正4年から13年にかけて各専攻で卒業生に中等教員資格が無試験で認められるようになりました。絵画科は図画科の教員免許ですが、当時は、東京女子師範大学(現在の御茶ノ水女子大学)などに限定されていたので、私立学校で認められたのは非常に珍しいことでした。また、当時官立の美術学校は女子の入学を認めず、女子の入学は、私立女子美術学校がほぼ唯一でした。

私立女子美術学校創立の明治33年は、女子英学塾・東京女医学校(東京女子医科大学)といった、高度な専門教育を目指す女子高等教育機関がうまれた年でもあります。

私立女子美術学校での功績

最初の入学式が明治34年4月1日に本郷(東京都文京区)の校舎で行われ、教職員16名、入学生14名でした。

すぐに経営難になり、玉子は病身で資金援助を求めて奔走し、文蔵は東京美術学校での報酬をつぎ込んだと言われています。さらに創立者のうちの二人が学校を去り、出資金の返済を請求され、廃校の危機に陥りました。ここで志津が登場します。二人の出会いはいく分かっています。創立当時から志津は賛成者だったと言われています。

明治34年11月に文蔵・玉子が発起人の権利を志津に一任し、その指揮下で学校に尽くすという誓約書を提出しました。明治35年1月には校主となります。翌年1月に玉子が順天堂での治療の甲斐なく亡くなり、明治37年、文蔵が校長を退職すると、志津が校主に加えて第二代校長に就任しました。当時の学校規則には、校主・校長・舎監に志津、評議員には津田梅子の名前があります。

最大の課題は、資金不足でした。志津と進が有力者に寄付を依頼する書簡が残されています。校舎増築の寄付を求める書簡に志津・校主、文蔵・校長、玉子・舎監の署名があり、賛成員として大隈重信や渋沢栄一などの有力者、旧佐倉藩主の堀田正倫の名前もあります。そして明治35年に校舎が増築されました。

明治41年(1908)に校舎と寄宿舎で火災が発生しました。そこで、同じ本郷の菊坂町に土地を購入し、新校舎建築を計画しました。志津は知人縁者から出資金・寄付金を募り、自分の調度品や衣類を売却しました。当時の人々に「志津校長は自分の着物を脱いで学校に着せた」といわれました。こうして明治42年、菊坂校舎が完成しました。

大正4年(1915)、現在の付属高等学校・中学校の前身にあたる附属高等女学校を創立し、初代の校長に就任しています。後に私立佐藤高等女学校と名前を改称しています。

同年、女子教育の功労者として勲六等を叙され、宝冠章を授与されました。同じく女子英学塾の津田梅子や女子学院の矢嶋楯子も叙勲され、新聞にも報道されました。大正7年帝国教育会より教育功労賞が授与されています。

大正6年に財団法人に移行し、佐藤進が理事長になりました。その後、大正7年に流行性感冒にかかり静養しましたが、翌年67歳でなくなりました。

仮説・進の学びが志津に影響を与えた

本人の著作もなく、佐藤志津研究は深められていない状況です。進の日記を読むと、ベルリン大学留学で進が学んだことが志津に影響を与えたのではないかと推測できます。

進のベルリン大学留学中に普仏戦争が始まり、ベルリン郊外の臨時病院で研修を受けました。当時の日記には進が奇異に感じ、驚いたことが二つあったと書かれています。

一つは、白衣の女性が患者の食事や排泄を介助することを見たことです。彼女たちは赤十字社の篤志看護婦でした。

次に看護婦がドイツ兵とフランス人捕虜を同等に看護していたことです。進は慶応4年(1868)の戊辰戦争に軍医として従軍していたので比較したのでしょうか。

また、法学を聴講し、敵の定義を知りました。負傷し、武器を放棄した者は敵ではない、救助すべきという人道主義でした。進は、疑問が解け、感心したと回想しています。

進は帰国後、西南戦争、日清・日露戦争で軍医監・軍医総監を務めましたが、留学で学んだ人道主義の精神はこのときに活かされたのではないかと思われます。

明治19年、日本は赤十字条約に加盟し、翌年に日本赤十字社篤志看護婦人会が設立されました。志津は、明治27年に篤志看護婦になりました。進の話に共感したと考えられます。

志津の社会貢献活動の背景には夫、進から学んだ人道主義、博愛、平等、人権の尊重の思想

があったのではないのでしょうか。校主となっても活動を続けています。明治38年、宮城・福島・岩手県の凶作では白米九斗を送り、職員生徒一同として金50円を送金しました。

現在も生きる佐藤志津の教え

女子美術大学メディアアート学科では、東日本大震災で避難した人々のストレスをアートでケアするため子供たちと制作活動を行いました。ヒーリングアートによる医療・福祉施設の環境改善にも取り組んでいます。小児外来の診察室に昔話の絵を描き、CTスキャナーを潜水艦に見立てて、海底旅行をイメージした部屋にしています。

染や織や刺繍の技術は創作のために学んできますが、それを活かして祭礼の山車幕などの文化財を修復しています。津波で被災した陸前高田市立博物館所蔵資料の安定化処理、福島県相馬郡の教会の再生にも携わっています。

女子美術大学染織文化資源研究所では、文化財修復や資源研究、人材育成を行っています。自立、自己実現のために専門性を高める教育と知識、技術を社会貢献のために活かす姿勢は、志津の教えが生きていると言えるのではないのでしょうか。

現在、大学・短大では一年生が学校史を学びます。単なる学校の歴史ではなくて、佐藤志津、横井玉子がロールモデルとして学生に深く影響を与えていると考えています。

オープンディスカッション

進行 敬愛大学国際学部教授 村川 庸子先生

高橋直子先生への質問

「女子美術大学と順天堂・佐藤家の関係」

志津の後、進が校主・校長を務めました。その後、志津と進の養子の達次郎が順天堂第四代堂主と女子美術大学理事長・学長を務めています。開校後約半世紀にわたって理事長・学長は佐藤家の方々が務めており、現在も評議員など

を務めています。

大類久恵先生への質問

「梅子の留学生生活」

大陸横断鉄道があり、留学生同士の交流はあったようです。子供がいないランマン夫妻に我が子のようにかわいがられていました。日本の両親とは手紙で連絡し、日本文化を学ぶ機会はずっとなかったのでしょうか。

「梅子の宗教」

留学時に早くキリスト教徒になり、ランマン夫妻と共に近所の教会に通っていました。

「梅子の結婚」

一生独身でしたが、捨松が結婚した頃に、結婚相手を紹介されたが、結婚より女子高等教育機関の設立に尽力したいのでお断りした、という記録があります。

「梅子の資金」

国内の名士からの寄付だけではなく、自力を重ねた。アメリカでもフィラデルフィア委員会のように日本の女子高等教育に賛同して資金援助がありました。宣教師とは一線を画していました。

村川庸子先生への質問

「梅子は佐倉に住んだことがあるのか」

仙が江戸の津田家の養子となって生まれたので、佐倉には住んでいません。

「なぜ6歳で留学したのか」

姉が候補だったが、嫌がったと言われています。女子留学生は、旧幕府側です。三人は父親が兄に外国渡航経験者で、二人は外交関係者の娘でした。海外事情に精通していたので娘を送り出したのでしょうか。

「明治の女子教育と佐倉」

敬愛大学国際学部教授 村川 庸子先生

明治33年(1900)に女子の高等専門教育を目指す三つの教育機関が設立されました。その中の一校、女子美術学校と女子英学塾に佐倉ゆ

かりの二人の女性、佐藤志津と津田梅子が大きく関わっていました。女子美術学校の創立者である横井玉子の思いを山崎光夫の「二つの星」では、「女子の職場を確保し、女性の自立を図りたい」との思いから学校を建てたのです。その思いにやささかの後悔も動揺もありません。」と描いています。志津ばで倒れた横井の後を引き継いだのが佐藤志津でした。女子英学塾の津田梅子は、「教師であれ主婦であれ、どのような方面の仕事であれ、高尚な生活を送るよう努力をして下さい。古い時代の狭量さ偏屈さを皆さんから追い払い、新しいことを求めつつ、過去の日本女性が伝統として伝えてきた優れたものは、すべて保つ努力をして下さい」と述べています。日本が近代化の道を歩み始めたばかりの頃でした。

佐倉の文化的風土

佐倉の文化的風土がこの二人の女性に大きな影響を与えたことは確かでしょう。それは近代佐倉のもっていた国際性でした。藩主堀田正睦は黒船来航時の老中で、開国への道を拓きます。藩政改革にも力を注いでいます。蘭学が奨励され、身分の上下を問わず才能のある者には学びの機会が与えられました。蘭語の習得、医学、砲術、兵学に始まり、やがて政治、経済、社会文化など広範な裾野を見えます。梅子の父、仙のように英語の習得を目指し、海外に赴く者も増えていきます。

佐倉の洋学の展開で特筆すべきは、国内ばかりでなく世界に広がるネットワークの構築でした。長崎で蘭医学を学んだ者ばかりでなく、多くの藩士が、蘭学では緒方洪庵、砲術では高島秋帆(長崎)、兵学では江川太郎左衛門(伊豆斐山)などの元に出向いています。兵学者佐久間象山(松代藩)の元には西村茂樹、木村軍太郎ら14名の佐倉藩士が送られていました。逆に藩内では佐藤泰然が医院兼教育機関である佐倉順天堂を開き、二代目の尚中が長崎留学より帰国した後は全国から門下生を集めます。佐藤志津は

その娘です。洋学者手塚律蔵(山口県周防出身)は攘夷論者の追求を受け、佐倉藩に召し抱えられました。彼自身も維新後は開成学校教授を経て維新後外務省に出仕しますが、他方で江戸に私塾又新堂を開塾し、西村茂樹、津田仙、西岡木戸孝允、新島襄ら門人の指導にあたります。塾頭であった西岡(哲学者、啓蒙思想家)も津和野藩を脱藩していますが、手塚にその能力を高く買われ、義弟として佐倉藩に召し抱えられた後、蕃書調所教授手伝並に推挙されます。

津田梅子の留学を支えた人々

梅子の人生はその節々で父である仙に導かれているように思われます。

仙は慶応3年(1867)に幕府により派遣された米国への使節団に通訳として加わっています。女児誕生に失望し、家を飛び出した、帰国後の梅子の西洋化に戸惑ったという逸話がありますが、帰国後に日本語を忘れてしまった梅子を父と日本で英語教育を受けた姉が助け、彼女のために洋館を建てて生活を気遣ったという話もあります。梅子の結婚を考えていないと捨松から批判されたとも言われていますが、娘の生き方を認めていたとも考えられます。不仲説は、後で面白く書かれたのではないのでしょうか。

梅子の留学に道を拓いたのは、仙が渡米時に出会った駐米公使の森有礼です。森は慶応元年に薩摩藩派遣でイギリスに留学しました。後に初代文部大臣になり、西村茂樹とともに明六社を設立した人物でもありました。仙の渡米の数年後、森は米国視察中の、同じ薩摩藩出身で北海道開拓使長官であった黒田清隆に日本の近代化の為に女子教育が必要であることを説きます。岩倉遣欧使節団に梅子ら五人の女子留学生を同伴させたのは黒田でした。梅子は森の下で働いていたランマン家にホームステイし、米国の生活に慣れるまで世話をしたのは、父と共に又新堂で学んだ新島襄でした。

華族女学校校長だった西村茂樹も佐倉藩出身です。明治日本の教育界の重鎮でした。彼はし

ばしば福澤諭吉と対比されます。福澤は開放的、開明的、西村は儒教的、伝統的だと言われ、福澤は女子教育についても、兵学を除く全ての西洋諸学は女性に有用だと説いています。西村は、行き過ぎた西洋化を否定し、徳育を重んじる教育の必要性を強調しますが、独立国家にふさわしい国民育成と女性教育の意義を説いたところは福澤と共通しています。梅子の二度目の留学の際に華族女学校を休職扱いとし、留学資金を学校から支援したのも西村でした。米国で教育を受けた梅子が、福澤よりも西村の教育観に共感を覚えているように思われるのも興味深いところudur。

おわりに

女子美術学校と英学塾には共に女子高等教育の発展を願う女性のネットワークと身近なところで彼女らを支えた家族の助力がありました。志津ばで倒れた横井玉子を支えたのは佐藤志津、英学塾設立を目指す津田梅子を支えたのが大山(山川)捨松でした。佐藤志津は順天堂三代目の佐藤進の妻であり、彼女自身に海外渡航の経験はありませんが、夫の進は明治政府派遣留学生第一号としてドイツへ留学しています。仙は渡米時に小中学校の見学も行ったと言われます。男子と机を並べて女子が学ぶ姿を見た経験が幼い娘の留学につながったのだと思われます。

佐倉の蘭学が拓いた地平は、日本社会の閉鎖性を越え、地域を超えるネットワークが国際的な人材の育成につながりました。翻って現在の日本の女子教育はどうでしょうか。先日、医大の入試での女子受験生への差別が話題になりました。2017年度の世界各国の男女平等の度合いを示した「ジェンダー・ギャップ指数」では、日本は調査対象144カ国中114位、前年度より三つ順位を落として過去最低となっています。佐藤志津や津田梅子の思いを引き継いで行かねばと改めて感じています。